

令和6年9月

茨城森林管理署長 金谷範導

はじめに

茨城森林管理署を訪れてお気付きになられた方も多いかと思いますが、道路に面した敷地の入り口には、この場所が我が国初の施業案（森林の経営計画）が編成された笠原国有林跡地であり、計画的な森林経営の先駆けとなった歴史を顧みて立派な記念碑が建立されています。記念碑には、このあたり一帯には水戸藩が管理するアカマツの美林が広がっていたことも記されており、背後に茨城県庁がそびえ立ち、周辺が市街地に変わってしまった現在の景観からは全く想像もつかない歴史や姿を伝えてくれています。

また、組織や物事には、現在に至る歴史やエピソードがあるものですが、当署にはもう一つ歴史的な場所として、全国植樹祭の原点となった全国緑化行事発祥の地があります。茨城県では昨年、第46回全国育樹祭が行われました。これは平成17年（2005年）に全国植樹祭が開催されたことを受けて実施されたものですが、昭和9年（1934年）4月には、現在の茨城県桜川市の鬼ヶ作国有林において我が国初の全国的植樹行事となる、第一回記念植樹が実施されています。実は、この取組が国民的緑化行事の原点となって全国植樹祭に引き継がれています。植樹地に建立された記念碑にはこうした経緯が記されているところです。

当署が所管する国有林の中には、ほかにも歴史的なエピソードを持つ場所は多数あるかと思いますが、こうした特別な場所や歴史的経緯に思いを巡らせながら、管内の概要等をご紹介します。



写真1 我が国初の施業案の記念碑
(背景左側は茨城森林管理署庁舎、右奥は茨城県庁)

茨城森林管理署の概要

茨城県水戸市笠原町に所在する茨城森林管理署。その昔は水戸営林署として水戸駅の北

側にありましたが、平成2年（1990年）に現在の笠原町に移転して、新庁舎の開庁式も行われました。地域の国有林から生産された材を活用した新庁舎（当時は水戸営林署）は、30年以上の時を経たことで色合いなどは変化しているものの、木造庁舎の美しさや趣が今でも感じられるところです。



写真2 平成2年（1990年）完成したばかりの新庁舎

笠原町への移転後は、近隣の営林署を統合して名称が茨城森林管理署になるとともに、その管轄区域は茨城県下一円の国有林（1県1署）となり、現在約4万5千ヘクタールの国有林を管轄しています。

ここ茨城県は、中南部に広大な農地が広がり、美味しい農産物が多数あるとともに、霞ヶ浦を筆頭に湖沼も多いため、どちらかという平坦な土地のイメージが浮かぶのですが、森林率は県土面積の約3割、国有林はその4分の1ほどを占めています。森林の多くは県北地域に集中しており、スギ、ヒノキなどの人工林で構成されています。また、管内国有林では日本三大名瀑の袋田の滝や新緑・紅葉、奇岩・怪石の男体山、日本百名山の筑波山などがよく知られるところです。

このほか、採石用原石に加え山砂利・山砂と呼ばれる真砂土や花崗岩（いわゆる御影石）等を採取する採石事業も行われ、地域環境等への配慮を行いながら建設用骨材等が供給されています。

スギ、ヒノキの良材生産地として全国屈指の木材供給

管内の国有林は8割がスギ、ヒノキ主体の人工林で構成されており、全国平均の人工林率（約3割）と比較して極めて高い比率を占め、安定的な木材供給を支えています。また、過去には林道管理路線数No.1として認定されたこともあるなど路網整備も進んでおり、多くの高性能林業機械を保有し生産能力の高い林業事業者などにも支えられて、一署あたりの収穫量では全国屈指の実績となっています。

また、こうした高い木材供給力を発揮することが可能なこともあり、令和3年9月には

樹木採取権制度に基づいてパイロット的な樹木採取区が指定されました。これにより、採取権者への安定的な木材供給を行う取り組みが始まっており、制度の趣旨を踏まえた成果が期待されています。

このほか、管内では大型の乾燥・製材工場、集成材工場、プレカット加工施設、木質バイオマス発電所等の整備が進む中で、県内の林業・木材産業の再編・集約・振興を図ろうとする機運が高まり、県北地域の常陸大宮市と常陸太田市にまたがる宮の郷工業団地には、森林資源に近い立地を活かした一大木材産業団地が形成されています。ここには、原木市場、木材乾燥施設、ラミナ製造施設、木材チップ製造施設、プレカット加工施設、製材加工流通施設、木質バイオマス発電所などの木材産業関連施設が集積する形で整備が進み、茨城県の林業・木材産業の中核となっています。

森林・林業の持続的な発展への貢献と心配される課題

当署では、先人が育ててきた豊かな人工林があり、成長に適した自然環境やきめ細かく整備された路網といった様々な立地条件を活かして全国屈指の木材供給を行っているところです。また、これからの森林・林業の持続的な発展のためには、コストの削減が民有林・国有林とも共通の課題であり、常に技術開発等を進め現場にフィードバックしていく必要があります。このため、低コストで効率的な作業システム等の構築を目指して、伐採と植栽を一括して連続的に実施する一括事業やコンテナ苗の活用など、省力化・効率化を図る事業に取り組んでいます。また、各所で取り組まれているドローンやGISを活用した省力化・低コスト化についても積極的に推進しています。

このほか、効率的な森林育成のカギを握るエリートツリーやコウヨウザン等の植栽試験地の設置や、下刈省力化に向けた大苗等の植栽に係る現地検討会を開催するなど、様々な取り組みを進めています。

こうした技術開発等には専門的な知見が不可欠なところですが、茨城県内には森林・林業・木材産業に関する総合的な試験研究機関である森林総合研究所（つくば市）があるほか、遺伝的に優れた特性をもつ林業用種苗の品種開発、先端技術を用いた育種期間の短縮、遺伝資源の収集・保存、林木育種の海外協力などを行う林木育種センター（日立市）、関東森林管理局の試験研究機関である森林技術・支援センター（笠間市）等があり、こうした関係機関により学術的な見地から支援をいただいております、今後も一層連携して取り組んでいく考えです。

一方で、地域の林業にとって心配な課題として、二ホンジカによる食害の影響があります。今の時点では、大きな被害には至っていませんが、生息分布の空白地帯といわれていた茨城県でも、目撃例が増加するとともに、メスや幼獣も見られるようになっており、センサーカメラ設置によるモニタリングなど警戒を強めています。

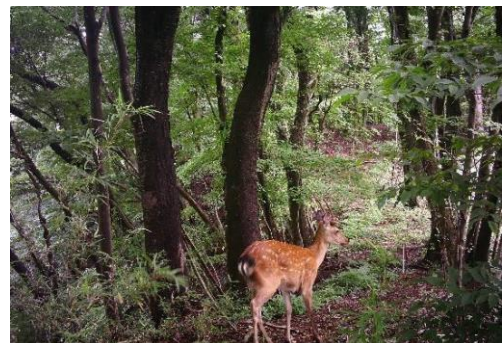


写真3 撮影された二ホンジカ

おわりに

茨城森林管理署では、全国屈指の木材供給や様々な技術開発等に取り組んでいるところですが、今日こうした取り組みが可能なことは、いずれもこの地に木を植えて育ててきた歴史があり、しっかり国有林野が維持されてきた証です。全国植樹祭の原点として第一回の植樹行事が行われた歴史的な場所を管内に有し、その想いを引き継いで植林を実践してきたからこそこのものと感じます。また、植林の実践のみならず、森林・林業体験等への支援や森林・林業の普及啓発活動に取り組むほか、森林の多面的機能などを YouTube 動画「森林の教室」シリーズとして発信するなど、植樹活動の原点としての歴史や想いは現在の業務にもしっかりと引き継がれていると感じます。

管内の人工林は、今まさに主伐の時期を迎え、植えて、育てて、収穫するといった林業の循環の大きな節目にあると感じています。この場所で編成された我が国初の施業案は、最多の収穫と連年保続を目的とする方針の下で編成されたようですが、法正林とはいかず齡級構成に偏りがある管内人工林。図面を眺めながら、土壌の物理的な性質から動植物の生態、さらには経営に至るまで、幅広い学問を抱合し裾野の広い林学科において、遠い昔に耳にした経営の保続という言葉をぼんやりと思い浮かべながら、先人たちの施業案に恥じない管理経営を目指そうと身の引き締まる思いです。

